

第 3 回小委員会（平成 25 年 4 月 23 日）の論点整理

骨子案に対する意見

環境学習でめざすもの

(1) 滋賀らしさ

- ・ 琵琶湖に焦点をあてすぎではないか。「琵琶湖を守ろうとしてきた県民意識」、「琵琶湖のほとりで育まれた豊かな生活文化に愛着と誇りを持ち」を結論に持っていき、琵琶湖を含むトータルな滋賀というイメージを出した方がよいのでは

環境学習で何が大切か

(1) 「つながり」の整理

- ・ 世代のつながりを一つの柱にするのであれば、世代内のつながりと世代間のつながりの二つをしっかり入れておく必要がある。
- ・ 一番大きな目標として世代を超えて未来世代に自然環境、あるいは意識を引き継いでいくということが大前提としてある。「世代のつながり」という言葉をここで入れる必要はないのでは。
- ・ 国の法律が改正されて、重要なキーワードは協働であり、しっかりと柱に位置づける必要がある。事務局が整理する。

環境学習を推進するために

(1) リーダー育成、活用

- ・ 指導者という言葉には上から下に教えるというイメージがあるので、水平の中で引っ張っていくという意味では「リーダー」という言葉がふさわしい。
- ・ リーダー育成の機会、研修の場がまだ少ない。地域の人材には、非常に優秀な人材がいるが、学校の先生のように、子どもにどう伝えるか、意欲を引き上げるか、ということがわからない場合があるので、研修があれば、その人の力を生かすことができる。こうした研修は拠点施設が担うべき。
- ・ 社会教育の観点では、まだまだ啓発事業の段階で終わってしまっている。意識の向上という点では意味があるが、リーダーとして育てていくという意味では、長期的で体系的な、成人向けの環境学習の機会があってもよい。学びを行動に生かす鍵が仲間づくり。
- ・ 環境学習プログラムを考えるときに、単に知識を与える学習では限界がある。行動する人を育てるためには、プロセスの中に、仲間作り、人と人のつながりを意識した環境学習が大きな課題
- ・ 全体を網羅するような人材を育成し、地域で活動を広げていくアプローチと、専門人材をうまくつなぐアプローチと二つある。後者の場合はコーディネーター人材が重要

(2) 地域人材の発掘、活用

- ・ 地域人材は豊富で、環境に係る NPO の多くが地域で実践をし、地域の子どもや大人が参加する仕組み。実践が先で学習が後という形を意識しなければならない
- ・ 公民館にはいろんな人材が集まり、特にシニア層は様々な技術を持っているが、生かされていない現状

- ・ 世代間のつながりに関係して、シニア層の方が地域に出て行って、地域の子どもたちと交流を持ってもらうことが地域の活性化につながる。シニアの方自身もそういう活動をすることによって元気になる。
- ・ 今の子育て世代は自然体験が一番薄い層になっているので、親子そろってのプログラムや三世代交流プログラムの形も考えられる。

(3) コーディネート人材、拠点の見直し

- ・ 環境学習をバランスよく進めていくという点では「総合性」が重要。環境学習に携わる人たちの総合性のボトムアップをはかりつつ、より専門的なところもフォローができるようなイメージの体制を作るべき。
- ・ 環境学習拠点がいくつかあるが、拠点間同士の情報交換がまだしっかりできていない状態。連携していくときに、環境だけに特化するのではなく、別の部門との協働により、相乗効果を生み出すような形が必要。
- ・ 一つの分野に凝り固まるのではなく、双方向から環境について考えていく必要がある。
- ・ コーディネーターは、いろんな側面から総合的に人と人をつなぎながら、一緒に地域をつくっていくことができないか。
- ・ NPO 間の連携や交流会、プログラムの提供等が必要
- ・ 公民館の役割は大きいですが、NPO や他の団体とのつながりが弱い。つながりを作っていくこと、地域人材の発掘、コーディネート人材の育成を、それぞれの拠点が意識しないといけない。
- ・ 学ぶ側の観点から考えたときに公民館は非常に重要な場。環境に興味を持ってない方でも、たまたま環境の要素が組み込まれた講座を受けることで、一緒に講座を受けてきた仲間と環境行動を起こすということがある。環境意識を持っていない方の意識を開拓するというのも環境学習の重要な部分。

(4) 県民一人ひとりの実践

- ・ 推進するため方向が記載されているが、人材育成に偏りすぎている。教育をする側がうまくすれば環境学習が推進されるという視点もあるが、県民一人ひとりが環境行動をとるということを目指すならば、学ぶ側の学びの機会を充実させることが大切。
- ・ 一人ひとりの学習を推進するためには仲間が必要で、石けん運動も仲間がいたから推進できた。仲間づくりというのは一つのキーワード。

(5) 学びのつながり・地域連携

- ・ 人材を育てていくということから、まずは学校教育のことを考えないといけない。学校での環境教育のポイントは、教科間のつながりをカリキュラムの中に取り入れ、教員間で意識づけしていくこと。進んでいるところでは ESD カレンダーという教科と教科のつながりが見える形で取り組まれている。また、学校教育と地域との協働の視点を忘れてはならない。
- ・ エコ・スクール活動は ESD を中心とした環境学習においては大きな意味がある。ESD の観点から地域と学校が連携するという意味ではエコ・スクールを再活性化させるのも一つ

滋賀県における今後の環境学習のあり方について(骨子案)

1. はじめに

<p>私たちが 目指すべき社会</p>	<p>琵琶湖をはじめとする滋賀の環境と生態系が健全に保たれ、バランスのとれた経済発展を通じて、県民すべての生活の質の向上が図られている豊かで安全な社会</p>
<p>実現するため には…</p> <p>➔</p>	<p>持続可能な 社会づくりのための 環境学習の 必要性</p> <p>環境教育等促進法の改正や東日本大震災後の環境配慮型ライフスタイルへの意識の高まりなどを受け、持続可能な社会づくりに向けて価値観や行動を変革していくことや、人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性といった「関わり」、「つながり」を尊重するというESDの考え方を踏まえた「持続可能な社会づくりのための環境学習」について考えていく必要がある。</p>

2. 環境学習のめざすもの

<p>社会づくり・ 人づくり</p> <p>滋賀らしさ</p>	<p>【基本目標】</p> <p>主体的に環境保全行動を行う人育ち・人育てによる持続可能な社会づくり</p> <p>琵琶湖のほとりで育まれた豊かな生活文化に愛着と誇りを持ち、過去から受け継がれてきた美しい琵琶湖とその琵琶湖を守ろうとしてきた県民意識を、世代を超えて未来へと引き継いでいくこと</p>
--	--

3. 環境学習で何が大切か

<p>行動(体験/ 実践)する</p>	<p>環境の恵みを、体験を通して全身で感じること、そして、地域の身近なところで起こっている課題の解決に向けて実践すること</p>				
<p>「つながり」を 意識し、深める</p>	<p>人と人のつながり、自然とのつながり、社会とのつながりなど、多面的なつながりを意識し、理解を深めること。</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="414 1144 622 1279"> <p>場のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> あらゆる場で ライフステージに応じて </td> <td data-bbox="630 1144 981 1279"> <p>人と人(主体間)のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 人と関わりを持ち 協働、連携を重視して </td> <td data-bbox="989 1144 1220 1279"> <p>課題のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 総合的に体系的に 地域に根ざして </td> <td data-bbox="1228 1144 1436 1279"> <p>世代のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 次世代を意識して </td> </tr> </table>	<p>場のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> あらゆる場で ライフステージに応じて 	<p>人と人(主体間)のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 人と関わりを持ち 協働、連携を重視して 	<p>課題のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 総合的に体系的に 地域に根ざして 	<p>世代のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 次世代を意識して
<p>場のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> あらゆる場で ライフステージに応じて 	<p>人と人(主体間)のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 人と関わりを持ち 協働、連携を重視して 	<p>課題のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 総合的に体系的に 地域に根ざして 	<p>世代のつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> 次世代を意識して 		

4. 環境学習を推進するために

<p>・「つながり」を「つなく」へ (場をつなく、人をつなく、課題をつなく、世代をつなく)</p> <p>人づくり、つながりづくり に向けて…</p> <p>➔</p>	<p>・指導者の育成、活用</p>	<p>・地域人材の発掘、活用 (特にシニア層)</p>	<p>・コーディネート人材、 拠点の見直し</p>
<p>↓ 具体的にどうすればよいのか…</p>			

5. 各主体の具体的役割

<p>県民</p>	<p>各主体がつながりあうこと</p>			<p>行政(県・市町等)</p>
<p>NPO・地域団体</p>		<p>事業者</p>	<p>学校</p>	
<p>持続可能な社会づくりのために今求められる消費学習、活動に着目して、各主体の役割</p>				

6. 最後に

<p>環境学習の 目標達成の指標</p>	<p>環境学習の目標達成度は、学習機会や指導者・サポーターの増加といったアウトプット指標ではなく、取組により、どれだけの人々が持続可能な社会づくりに向けて実践するようになったかというアウトカム指標で測るべき。</p>
<p>従来枠組みの 検証</p>	<p>主体的に環境保全行動を行う人育て、人育てによる持続可能な社会づくりに向けて、環境学習に関する従来の推進枠組みについて検証を行うこと</p>